

連帯の幻想と孤独の現実

—— アンダーソンが予言し、カウリーが検証した 1920年代のニューヨーク*

藤 野 功 一

序

2020年の初頭以来、今に至るまで続く新型コロナウイルスの流行によって、ニューヨークをめぐる状況は大きく変化し、都市では多くの人々が社会の分断を実感した。去年からの状況を概略すると、2020年1月23日に武漢がロックダウンされたのち、北京、パリ、ニューヨーク、ロンドン、東京といった、大都市における人々の移動が制限されてゆくなか¹、大都市の代表であったニューヨークも人々の触れ合う機能を失い、それまで、そこに住む人々にとってさえ、「あまりに混雑した」²場所であったニューヨークは、突如として「それまでよりずっと静かな」³、あるいは、空虚な空間となった。3月のニューヨーク・タイムズは世界中の都市で出現した、人々の行き来の絶えた空間を「大いなる空虚」(“The Great Empty”)と名付け、もと世界貿易センタービル跡地にできた、いつもは混雑する鉄道のかえ駅「オキュラス」にすっかり人通りが絶えた様子など、各地の大都市に出現した空虚な空間を印象的な写真で示した特集を組んだ。

新型コロナウイルスとともに、都市には空虚な空間が蔓延し⁴、3月には、通常であれば社会的連帯を示すのに巧みなニューヨーク住民も、交流を奪われ、ソーシャル・ディスタンスを余儀なくされ、まるで自分たちが「毘にかかったようだと感じている」とのオピニオン記事が掲載された⁵。ニューヨークは「ゴースト・タウン」⁶のようになり、アメリカ国民は社会的連帯を実現して、パンデミックの最悪の事態を避けることができるだろうか⁷、という深刻な問いかけ

が、5月のニューヨークタイムズに掲載された。しかし、この問いかけを嘲笑うかのように、新型ウイルスの蔓延は人々の交流の場を奪っていった。

都市における連帯の喪失は、ニューヨークにおける人種問題と経済的な格差の問題をより際立たせることになった。ことに、ジョージ・フロイド (George Floyd) が、2020年5月25日にミネアポリス近郊で警察官に殺害されると、この事実がツイッターによって広く拡散され⁸、それ以前の2013年ごろから続いていたブラック・ライヴズ・マター (Black Lives Matter) 運動が大きな盛り上がりを見せはじめ⁹、ニューヨークでも、ブラック・ライヴズ・マターを標榜した大規模なデモが起きた。ブラック・ライヴズ・マター運動が、黒人ばかりではなく様々な人種と社会階層を含む運動に広がった背景には、新型ウイルスで失業し、不自由な暮らしを余儀なくされた住民の不満があっただろう¹⁰。ニューヨークほどはっきりと、社会的不平等、貧困、人種差別が新型ウイルスの蔓延と深く結びついているのを示している都市は他にない、という記事が示すように¹¹、人種及び経済に起因する問題は、ニューヨークの都市に住む人々全体の抱える問題であることが新型ウイルスの蔓延とともに鮮明になっていった。

その後も続くウイルス蔓延の中、医療福祉の問題を含めて、どのように連帯を取り戻すかが、ニューヨークばかりでなく、アメリカ全体に課題となってゆく。2020年7月には、公民権運動の指導者であるキング牧師のスローガンでもあった「愛と連帯」(“Love and Solidarity”) の題名で、ニューヨークの都市において再び「連帯」する市井の人々の努力を取材した記事が掲載された¹²。9月にはニューヨークのエンパイア・ステート・ビルディングが赤く照らされ、ニューヨークの人々へ連帯の呼びかけが行われる¹³。年末には大統領選挙においてトランプが敗れ、2021年初頭、大統領就任演説で、バイデンは“unity”という単語を連呼しながら、アメリカが再び一体となることを強調した¹⁴が、それはかえって現実のアメリカがどれほど分断されているかを示していた。ドイツのドキュメンタリーが「ニューヨークの富める人々と貧しき人々 — 不平等社会の危機」(“New York City rich and poor — the inequality crisis”) という題名のもと、ニューヨークの貧富の差と不平等を取材し、2021年1月から一年

ほどの間に325万回以上視聴された¹⁵が、そのときも、多くの視聴者に印象づけられたのは、新型ウィルスの蔓延によって拍車をかけられたニューヨークという都市における社会的分断の深刻な状況であった。おそらく、これから先しばらくのあいだ、ニューヨークでは、人々の連帯の機能をどのように回復させるかという議論が続くこととなるだろう。

ここ二年間におけるニューヨークの人々の分断の現状と、人々の中の連帯の必要性の高まりを追ってみると、現在のニューヨークに住む人々にとって、人々の中の分断と連帯の可能性が重要な課題であることがはっきりとしてくる。しかし、改めて理論的に考えてみると、そもそも都市において、連帯は可能だろうか。たとえばマイケル・ハートとアントニオ・ネグリは2009年の『コモンウェルス』における都市論の最後を締めくくるにあたって、「世界の大都市化は、必ずしも階層と搾取の構造の全般化だけを意味するのではない。それはまた反逆の全般化を意味し、ひいては協働とコミュニケーションのネットワークの伸長と、〈共〉（コモン）そして特異性同士の出会いの増強をもたらす可能性がある」¹⁶との希望を述べた。ネグリとハートは、あたかも昨年ブラック・ライヴズ・マター運動の大きな広がりを予言するかのよう、都市における人々の「協働とコミュニケーションのネットワーク」は可能だと主張したが、ただ、現在のブラック・ライヴズ・マター運動が、ネグリとハートが希望するような「反逆の全般化」をいまだに果たしていない現状を目の当たりにすると、ネグリとハートの、理想的な、やや空想じみた革命論は、どうにも現実離れして響くのも事実だ。

確かにネグリとハートが論じるように、都市の群衆に何らかの連帯の機運を見出そうとする場合、どのような経路を通るにせよ、ばらばらになって抑圧された都市の個人たちが、何らかの形で個人的な親密さを取り戻して、そこから中央集権的な構造の「帝国」的権力に反逆することのできる、なにか別の力が生まれるのではないか、という希望を語らざるを得ない。ほぼ一世紀の間、連帯への可能性を語る理論はそのような傾向を示してきた。約90年前の1935年にはヴァルター・ベンヤミンが、「複製技術の時代における芸術作品（第二稿）」において、ばらばらにほぐれた「プロレタリア大衆」(the proletarian masses)

こそが連帯する、という理想を語り (Benjamin 50)¹⁷、1996年にはホミ・バーバが、もう少し慎重な言い方ではあるが、『文化の場所』において、モノダ的 (monadic) に生きるひとびとや移住者 (migrant) などの、よそよそしいばかりの (unhomely) 状況での文化的混交 (cultural hybridities) のなかで、人々を隔てる裂け目の中に親密さ (an interstitial intimacy) が生まれ、共有の空間 (a communal space) のなかで社会的連帯への深い欲望 (a profound desire for social solidarity) が生まれる希望を語った¹⁸。また、最近では、2015年にキャロライン・レヴァインが『^{フォームズ}様式』のなかで、中央集権的な通信ネットワークのなかにおいても、より個人的でマイナーなつながりを取り戻すことで、帝國的権力への抵抗の可能性を語り¹⁹、2020年には、イザベル・ウィルカーソンが、ベストセラー『^{カースト}階級』のなかで、アメリカがすでに階級化された社会であることを指摘しながら、その分断に抵抗するために、他者への共感 (empathy) の必要性を強調²⁰している。

これらの議論に示された豊かな語彙と考察に示された可能性を、私たちは引き継いでゆかなくてはならないが、しかし、現実を見てみれば、いまだに、ニューヨークは、つねに見ず知らずの他人同士が集まる孤独な場所であり、人々が劣悪な住環境の中に押し込められ、生き馬の目を抜くような激しい経済競争の中、貧富の差が開くばかりの場所でもある。実際のところ、ほぼ1世紀にわたるベンヤミン以来の都市論が、連帯への希望を語りつづけても、それらがニューヨークにおける人々の持続的な連帯に結実することはなかった。現在、貧富の差による社会的分断と人種差別は、新型ウイルスの蔓延とブラック・ライヴズ・マター運動の激化によっていっそうあらわになり、大都市化が進むアメリカの問題が最も先鋭的にあらわれるニューヨークには、ただ単に理論的に正しい言葉を掲げるだけでは解決できない、人々の連帯をはばむ根深い問題があることを示している。

人々の連帯を分断し、孤独へと陥らせる「近代都市のシステム」がニューヨークに根付いた時期は、1920年代前後である。野心にあふれて田舎からやってきた若者が、いつか都会に生きる人々との交流を楽しむものの、結局は、信頼するに足る連帯を失って孤独へと陥る運命をたどるという、ニューヨークにお

ける連帯の幻想と孤独の現実につつまる文学的イメージは、アンダーソンの短編「孤独」(1919)によって予言的に描かれて以来、1920年代のフィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーといったモダニズム作家たちの代表作におけるニューヨークの描写によって補強されてきた。これらの作家たちはいずれも、マンハッタンを中心としたニューヨークの世界を、外側から冷ややかに見る立場で描き出し、殊に都会における個人の孤独の現実を強調した。そしてさらに、1920年代をニューヨークの内側で過ごした人々が、実際にどのような連帯を経験し、そして連帯を失ったとすれば、どのように失ったのかについては、マンハッタンで20年代を過ごし、文学的ニューヨークの実態をつぶさに眺めてきたカウリーがその自伝的作品『亡命者の帰還』(1934, 1951)で、ニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実を示すことになった。この論では、これらの文学作品に拠りながら、ニューヨークで人々の連帯を阻むものは何であるのかという問いについて、ニューヨークを舞台とした文学はどのような答えを示してきたのかを考察することにした。

1. アンダーソンの短編「孤独」の予言

アンダーソンの短編「孤独」でアンダーソンが予言的に描き出した、ニューヨークにやってきた若者の陥った孤独はどのようなものであったのだろうか。まず、この短編のあらすじを確認しておこう。この短編の語り手、イーノックは、若い頃、21歳の時に画家として成功を夢見て、自分の故郷であるオハイオ州ワインズバーグを出てニューヨークへ向かい、そこで15年間を過ごしたのち、夢破れて故郷へと帰ってきた老人である。若いイーノックは最初にニューヨークに出て行った時にまずワシントンスクエアに面した部屋を借り、そこで、都会の芸術仲間との交流を行いもしたが、皮肉にもその交流によって、イーノックはより理想的な仲間との連帯の幻想をかき立てられ、子供っばいまでに、自分のことを深く理解してくれる仲間を求める。しかし結局、そんな理想的な仲間が見つかるはずもないので、イーノックは彼を理解してくれない、都会の芸術家気取りの仲間たちに対して心を閉ざすようになり、彼自身の芸術の可能性をしておれさせてしまった。ニューヨークでイーノックが夢見た連帯の可能性

は、現実にはそもそも存在さえしなかったのだが、皮肉なことにイーノックは、その連帯の幻想の方により魅力を感じてしまったがために、後にブルックリンで家庭を持ったときも、夫として、父親としての務めを果たすことに失敗してしまう。彼は精神の安定を失い、結局、女性とのスキャンダルを起こして故郷のワインズバーグに戻るが、そこでも、彼はなまじニューヨークで夢見た連帯への期待があるために、かえって現在の自分の孤独を大きく感じている、惨めな老人の語り手となってしまう。

この短編は、シャーウッド・アンダーソン自身が気に入っていた短編 (Moreland 51) として知られているが、おそらくその理由の一つにあるのは、この作品で、アンダーソン自身が身近に見聞きしていた、ニューヨークにやってきた若い芸術家のしばしば陥りがちな運命が、寓意的な表現の中に見事に描き出されているからだろう。

野心に満ちて田舎から都会に出てゆく若き芸術家の悲劇を描くこの短編は『ワインズバーグ・オハイオ』全体のなかでも重要な役割を果たしている。短編の結末で、「僕は孤独だ、ここでは僕は全くの孤独だ」という声に続けて、「ニューヨークのあの部屋で僕は暖かく人好きのする人間だったのに、僕はここで全くのひとりぼっちだ」(178) と叫ぶイーノックは、連作短編集『ワインズバーグ・オハイオ』をゆるやかにつなぐ主人公、ジョージ・ウィラードに自分の悲劇的な都会での顛末を語り聞かせるが、その語りは、この作品の最後で、作家志望の若者として、都会に出て行こうとする主人公のウィラードが、これから陥ってゆくかもしれない運命を暗示している。

ただし、この短編では、イーノックがニューヨークで孤独に陥った原因は、単純に自分の芸術を理解し尊重してほしいという願望を都会の仲間たちに求めすぎたためであるかのように書かれてしまっており、イーノックが孤独におちいった原因は、けっきょく彼の性格に問題があるのだ、と読めてしまうため、実際にニューヨークという都会が持っていた社会構造の問題点を、この作品は明らかに示していないという欠点があるだろう。

2. 1920年代のモダニズム作家たちの代表作におけるニューヨークの描写

その後1920年代になり、アンダーソンの次の世代の作家たち、フィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーといったモダニズム作家たちの作品も、このような連帯の幻想から孤独の現実へと至る道筋を、野心を抱いてニューヨークにやってきた若者の陥りがちな人間関係の特徴として描き出している。しかし同時に、彼らもやはり、登場人物たちが孤独に陥ってしまう原因をそれぞれ的人物の性格的な傾向や気質によるものとして描写してしまっているため、ニューヨークで一旦は人々との間につながりを築くことのできた人間が、その後、どうして人間関係をこじらせ、あるいは誇大妄想的な幻想を都会の人間関係に対して持ち始め、そしてしまいには孤独に陥ってしまうのか、ということの具体的なプロセスについては、その原因となっているはずの社会的な構造を細かく描写することがない、という、アンダーソンの短編が示していた欠点も、同時に受け継いでいるようだ。ここでは、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』、ヘミングウェイの『日はまた昇る』、フォークナーの『響きと怒り』、これらの作品におけるニューヨークの人間関係の描写を少し具体的に見ていってみよう。

まず、1920年代のニューヨークのイメージを多くの読者に焼き付けることになったフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』を見てみよう。ニューヨークでウルフシェイムというギャングとのつながりを得て、大金持ちへとの上がるチャンスをつかんだ主人公のギャツビーは、大金持ちにはなったものの、結局は人妻となってしまったデイジーの愛を取り戻すことができず悲劇的な死を迎える。この物語の終盤、語り手のニックは、ギャツビーの葬式に参加してもらおうと、ウルフシェイムに会いに行く。だが、ギャツビーと親密な関係を結んでいたはずのウルフシェイムは、ニューヨークでの彼の生き残るルールとして大事なものは「なにごとにも無関心でいるってこと」(163) だと言って、葬式への参加を断る。ウルフシェイムが端的に示す、ニューヨークの残酷な人間関係に、ニックは深く絶望し、その経験はニックにニューヨークを去ることを決意させる一因になるが、しかしこの過程の中で、一体こんなセリフを最後に言うことになるウルフシェイムとギャツビーがそもそもどのようなきっかけで親密な関係を結んだのか、そしてギャツビーがビジネスの世界で作り上げた

都会の人間関係はどのようなものであったのか、そして二人の関係がなぜこのように簡単に切れるのかについては、はっきりとした説明はない。

次に、ヘミングウェイの『日はまた昇る』の序盤の描写では、ニューヨークに行った小説家志望のロバート・コーンは、ニューヨークで女性たちにちやほやされ、また、自分の出版した本を賞賛してくれる出版者と出会うが、コーンはこのような新たなつながりを得て傲慢になったせいか、人が変わったように嫌な奴になって、パリへと戻ってくる²¹。そしてコーンは自分を今まで支えてくれた年上の妻のフランシスとの別れを考え始め、南アメリカへの旅行をしたいと考え始めるが、ここでも、ロバート・コーンがニューヨークでどんな人間関係を経験したのかについて、具体的な描写はないままに終わる。

また、南部を舞台としたフォークナーの『響きと怒り』では、実際に登場人物たちや語り手がニューヨークへと行くわけではないが、第三章で守銭奴のジェイソンがニューヨークの綿花市場への投資で損をしてしまったことによって、やけになって、ニューヨークにいる奴だけが自分たちの間で情報を独り占めして、自分たち地方の投資家に損をさせるようにしているのだと罵る場面²²で、しばしばニューヨークが言及される。ジェイソンの偏見に満ちた想像力の中で、ニューヨークは一部のユダヤ人が市場の情報を独占して利益を吸い上げている、という悪意に満ちたイメージが語られるが、だからと言って、ジェイソンがどのような経緯をたどって、野心を持ってニューヨークの綿花市場に投資をしはじめたのか、そしてどのような経緯で、ユダヤ人が市場の情報を独占しているのだというような妄想に近い認識を得るようになったかについては、具体的に描かれずに終わる。

これらの作品において、ニューヨークという都会は登場人物たちの運命に重要な影響を与えるが、そのわりには、20世紀初頭のニューヨークの具体的な人間関係や社会構造に関しては、暗示的な言及で終わってしまうか、あるいは具体的な描写がすっかり欠けてしまっている。このようなことがなぜ起こるかという、これらの作品において、ニューヨークがその内側からの視点からではなく、外側からの視点で描かれていることにその原因があるようだ。アンダーソンの「孤独」の語り手イーノックは、オハイオ州ワインズバーグ出身の田舎

者であり、最終的にはワインズバーグに帰っていく。『偉大なるギャツビー』の語り手ニックもまた、中西部出身者であり、ニューヨークの人間関係に積極的に関わろうとせず、最終的には故郷に帰る。『日はまた昇る』の語り手ジェイクは典型的なパリ在住の国外在住者であり、『響きと怒り』の語り手ジェイソンはニューヨークから遠く離れたミシシッピ州の南部白人である。これらモダニズム文学の代表作に描かれているのは、どれも外側から皮肉な気持ちで都会を眺めている者たちが垣間見た都会の人間関係の描写でしかない。

外側から同情なく都会の人間の生態を眺めているのだから、これら1920年代を代表するモダニズム文学において、ニューヨークの人間関係が、惨憺たるものに見えてしまうのも当然だろう。都会の暮らしを外側から皮肉にみているものにとっては、ニューヨークはそれこそ恐ろしい場所であり、うっかりニューヨークに住んだり、ニューヨークの冷たく取りすました都会人と関わりを持たたりするとひどい目に遭う、というふうに思われる。しかし、そういう偏見に満ちた見方をしている限り、1920年代に多くの人々を惹きつけた大都会ニューヨークの実態が見えてくることはないことも確かだろう。特に1920年代のニューヨークは多くの若者を惹きつけた、大変魅力ある都市であったのだから、そこにいち早く出現した都市の社会構造はどういうものだったのか、ニューヨークの内側で生きるとは実際にどういうことであったのかを明らかにすることが重要になるはずである。

そこで、次に、1920年代にマンハッタンの内側で生きるということがどういうことであったかを検証するために、実際に20年代のニューヨークの内側で生きた人間として、人々の成功と没落をまのあたりにし、都会の人間関係と孤独の状況を具体的に描写した文学作品、マルカム・カウリーの『亡命者の帰還』をみてみよう。

3. カウリーの『亡命者の帰還』によるニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実の検証

1933年に出版され、1951年に新たな章を加えて再出版されたカウリーの『亡命者の帰還』は、1920年代のニューヨークとはどういうものだったのか、とい

う問いに1930年代になってから答えた、当世一流の文学者による事後検証の書でもあった。カウリーはハーヴァード大学在学中に第一次世界大戦に従軍したのち、戦後奨学金を得てパリで学び、ボヘミアンの生活を送ったのち、1923年に野心に燃える作家志望の青年として、24歳でニューヨークにやってきた。彼はニューヨークにやってきた最初の頃の1923年から1925年の間に、マンハッタンで様々な企画・編集に関わりながら、記事、書評、詩や翻訳を様々な雑誌で発表したのち、1920年代の終わりまでをずっとマンハッタンの内側で生き、人々の生活をつぶさに目撃した文学者であった。²³。

1920年代前半のカウリーは、20年代のニューヨークで、その才能だけを頼りになんとか生活の糧を得ていた典型的な文学青年であり、ニューヨークにはカウリーと似たような若者たちで溢れていた。そして1920年代の後半になると、ビジネスブームが始まり、ロマンティックな広告を作り出すために、マンハッタンの広告業界にはデザイナー、スタイリスト、編集者、物書きが群がる。空前の好景気の中で、彼らは若いうちからチャンスを得て活躍でき、それなりの収入を得ることができた²⁴。地方ではとても食っていけない芸術家、作家志望の若者たちが、1920年代のニューヨークに移住することで、大なり小なり成功することができたのである。このような成功のチャンスが転がっていたからこそ、1920年代に多くの若者がニューヨークにやってきたのだと言えるだろう。

1920年代の好景気は、ニューヨークで才能だけを武器にして暮らす若い芸術家たちに、有利に働いた。出版社の隆盛とともに、文章の書き手が求められ、書けばそれなりの原稿料がもらえた。さらに20年代後半のニューヨークでは、知識人の理想的な生活が実現したかのようにさえ見えた。カウリー自身も経験したように、文学志望者の小さな文学的サークルが出来上がり、彼らはお気に入りのレストランやサルーンで、知的な交流を楽しむことができた²⁵。経済的な好景気によって出版社も潤い、週末ごとにどこかしらでパーティーが開かれ、若く貧しい文筆家、写真家、絵描き、デザイナーなどは、そこへ行けばただで食事を食べ、編集者に声かけられ、ちょっとした仕事にありつくこともできたのである²⁶。

けれども、そこに落とし穴があったようだ。好景気の時代にニューヨークに

住んでいた芸術家志望の若者たちは、週末にあまりに多くのパーティーに招かれ、本当はしたくもないけれども、払いは実にいい多くの仕事の提案を引き受け、簡単に手に入る金の分け前を少々手に入れるために、その気もないような仕事と人脈に手を染めてしまう。あるいはまた、妻帯者であっても、たまたまパーティーで出会った若い女性とかりそめのロマンスに走ってしまう。それが、1920年代のマンハッタンだった。そしてカウリーによれば、このようなお手軽な連帯とロマンスにまきこまれた若き芸術家たちは知らず知らずのうちに、自分たちが避けようとしていたはずの近代都市のシステムの一部となってしまう、そして、その都市のシステムによって彼らは、「外側からではなく内側から破壊されてしまった」(it defeated us from within, not from without)²⁷のである。

こうしてみると、1920年代に野心を持ってニューヨークにやってきた芸術家たちや書き手²⁸が、おそらくはかなりの成功も経験したであろう中でおちいっていった孤独というものの内実が、具体的にわかってくる。1920年代のニューヨークに連帯がなかったわけではない。そしてまた、1920年代のニューヨークに、うるわしい、あるいはロマンティックな関係がなかったわけではない。それどころか、むしろ逆であった。人々は、気楽に、きわめて気楽に、初めて会う他人と連帯の感情を持つことができ、そしてあまりにも気楽に、ロマンティックな関係に陥ることができた。それが1920年代の現実を生きたカウリーの描写するニューヨークである。ビジネスによってつながり、仕事がいくらでも回ってくる関係の中で、彼らは気軽な気持ちで連帯を結び、特にしたくもない仕事に手を出し、特にしなくてもいいような恋愛関係に陥る。そして目の前のいたるところに転がっている儲け話と浮気心のにせられたはいいものの、いつのまにかその気楽な連帯とロマンスの罠から抜け出せぬまま、彼らはつまらない細々とした仕事に才能を搾り取られ、本当は愛してもいないような相手との恋愛に疲れ果て、追い詰められ、内面を蝕まれ、そして孤独の中で破滅してゆく。このような状況の中、1920年代が終わりに向かうと、たとえ真に才能がある芸術家であっても、いや、あるいは、本当に才能があり、魅力にあふれていればいるほど、彼らは追い詰められていった。こうして、ゼルダ・フィッツジェラルドの言っていたように、若く才能ある芸術家たちは「他のくだらない人々と

同じように、追い詰められ、途方に暮れてしまうことになってしまった」のだろう²⁹。それが1920年代のニューヨークが、野心にあふれた才能ある若者に与えた都会の皮肉な「システム」であった。

うまくいっているうちは、彼らは経済的に独立し、恋愛はしても一人の恋人に縛られない、ニューヨークの1920年代に実現した都会的な自由を謳歌する、最先端の人間としてやっていけただろう。しかしそんな関係は、それを支えていた右肩上がりの株式市場という経済的な基盤を失うと、あっというまに崩れていき、彼らは虚ろな内面を抱え、信頼すべき関係を失った自分を見出し、そして孤独に陥っていく。1920年代末のニューヨークでは、いわば安直な連帯が連帯を破壊してゆき、そして軽薄なロマンスがロマンスを壊してゆき、信頼できる持続的な連帯や、成熟した個人を作り出す土壌となる愛情のある関係が掘り崩されていった場所であった。そしてカウリーが言うように、1920年代の都会的な生活は、「成熟した個人主義を生み出すことに失敗してしまった」³⁰のである。

結論

1951年に付け加えた『亡命者の帰還』のエピローグにおいて、カウリーは彼自身も属したアメリカの1900年前後生まれの芸術家や作家たちが1920年代の狂騒を経て1930年代に至るまでの運命を四段階にわたって描き出している。まずこの世代の若者たちは、第一段階として、自分たちの生まれ故郷から決別しようとする。たとえ自分の故郷に住んでいる時も、その旧弊な社会に違和感を感じ、自分の故郷にいながらもあたかも亡命者であるかのように振る舞う。次の段階として、彼らの多くは第一次世界大戦の戦役などによって海外に渡り、そして戦役が終わった後もヨーロッパでその後もずっと生きようとする。しかし亡命者としての生活は、彼らにアメリカについての別の視点を与え始めることになる。ヨーロッパで受けた薫育によって、彼らは次第に自分たちの国を尊敬することを学び、やがてアメリカを遠くから愛おしく眺める立場を取っていた彼らも、結局はニューヨークに帰ってゆく。

ニューヨークで彼らは人生の第三段階を迎え、経済的好景気の真っ最中に、

彼らは愚劣なアメリカ社会の大衆社会に染まることを潔しとせず、彼らは自分たちの個人主義を貫き、まるで孤島のように自分たちの領域を守ろうとする。しかしながら、彼らは自分たちのつつましい生活を守るために結局はアメリカの経済活動に依存していたのであり、彼らは週末の金持ちのパーティーに招かれる時は喜んでその孤島から離れて、社交生活を楽しんだのである。彼らは結局、ずるずると好景気の中の社会の狂騒に引き込まれることを許してしまった。その結果、その後の道徳的、そして経済的崩壊に巻き込まれてしまった。

そして1930年代に入った第四段階において、芸術家、作家たちは、自分たちが十把一絡げに考えていた大衆というものが、ただの均一な塊ではなく、様々なうねりの中で多様なグループが蠢くものであることを理解しはじめる。知識人たる彼らは、その中の一部に（たいていの場合は、リベラルの側に）入り、いわば政治的な党派に属することによって、彼らは再び人間らしい関係を取り戻していった。しかしその連帯の舞台はもはやニューヨークではなかった。むしろそれはプロレタリアートや階級、リベラルや保守など、経済的な、あるいは政治的立場によって表明される社会階層や政治的集団として意識されてゆく。カウリーの記述の中では、ニューヨークにおける知識人の連帯は、ほとんど1920年代の狂乱の中で一瞬だけ垣間見えた幻のように描写され、そして同時に、ニューヨークにおける個人の成熟もまた、達成困難なものであることが強調されている。

カウリーの記述から、1920年代のニューヨークでは、後戻りのできない大きなシステムの変動が起こったことが見えてくる。好景気に湧くニューヨークでは、そこで人々が陥る人間関係も大きな社会の流動の渦に投げ込まれ、ロマンスも連帯も、次から次へと移り変わり、新しいものへと目移りしてゆく人々の移ろいに飲み込まれる。そして、誰もその流動的な社会の動きを制御する決定的な手段を持たないまま、その渦に巻き込まれざるを得ない。

人間というものは、なかなか迂闊なもので、自分たちで新たな社会のシステムを作り出したはいいものの、そのシステムがもたらす運命がどのようなものを悟るのに、時間がかかるものようだ。1910年代、アンダーソンの予言的な短編「孤独」は、すでに20年代に先立って、ニューヨークで、都会の新たな

システムが生じ始めており、それに巻きこまれる若者はその都会の本質を見抜けないまま、結局は孤独に陥ってしまい、かえってより惨めな人生に陥ることになることを警告していた。しかしそんな予言があったにもかかわらず、イーノックと同じような運命を多くの人々が辿ってゆき、1920年代に書かれた3つのモダニズム小説の代表作に出てくる登場人物たちも、ニューヨークという大都市のシステムに翻弄されてゆく。『グレート・ギャツビー』の語り手ニックは、過去にこだわらずに次から次へと新しい人間関係と金儲けの話がやってくるニューヨークの都会に適応することができず、そしてウルフシェイムというギャングがまったくの損得感情だけでドライにギャツビーとつながっていたことにショックを受け、故郷へと戻っていく。『日はまた昇る』において、コーンは、ニューヨークの軽薄なビジネスのつながりと恋愛関係に影響を受け、年上の妻を捨てて新しいロマンスに走り、語り手のジェイクから徹底的に軽蔑される。また、『響きと怒り』において、ニューヨークの綿花相場に投資をして損をこうむるジェイソンは、ニューヨークの絶えず流動してゆく経済を見抜くことができず、あたかもニューヨークには固定化した金儲けの社交界があって、そこで陰謀のようにすべての市場が操作されているのだ、という幻想を持つ。いずれの登場人物も1920年代の新たな都市のシステムを見抜けないままに、それに翻弄される運命をたどったという点は同様だろう。そして、カウリーの『亡命者の帰還』は、1920年代に確立された都市のシステムがどのようなものであり、芸術家がニューヨークで陥る運命がどのようなパターンを示すかをより現実的に検証し、解明した。その後のニューヨークを舞台とした文学の多くが、あと戻りすることのない都市化のシステムのなかでの個人の成熟と持続的な連帯の可能性を模索する時も、前提としているのはカウリーが定式化した都市における人々の連帯の幻想と孤独の現実であっただろう。

** 本研究は JSPS 科研費 JP21K00357 の助成を受けたものである。

Works Cited

- Anderson, Sherwood. "Loneliness." *Winesburg, Ohio*. 1919. Penguin, 1992. 167-78.
- Benjamin, Walter. "The Work of Art in the Age of Its Technological Reproducibility." Second Version. *The Work of Art in the Age of Its Technological Reproducibility, and Other Writings on Media*. Ed. Michael W. Jennings, et al. Trans. Edmund Jephcott, et al. Belknap, 2008. 19-56. (「複製技術の時代における芸術作品」第二稿『ボードレール』野村修編訳 東京：岩波文庫、二〇〇一年)
- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. Routledge, 2004.
- Cowley, Malcolm. *Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920s*. 1951. Penguin, 1994.
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. 1929. Vintage, 1990.
- Hardt, Michael, and Antonio Negri. "Metropolis." *Commonwealth*. Belknap, 2009. 249-60.
- Hemingway, Earnest. *The Sun Also Rises*. 1926. Scribner, 2006.
- Levine, Caroline. "Network." *Forms: Whole, Rhythm, Hierarchy, Network*. Princeton UP, 2015.
- Moreland, Kim. "Just the Tip of the Iceberg Theory: Hemingway and Sherwood Anderson's 'Loneliness.'" *The Hemingway Review* 19.2 (2000): 47-56.
- Wilkerson, Isabel. *Caste*. Allen Lane, 2020.

* 本稿は、日本英文学会九州支部第74回大会（2021年10月16日、オンライン、リアルタイム配信）での口頭発表に加筆修正を加えたものである。

- ¹ 片小田廣大「武漢市、新型コロナウイルス感染拡大を受け移動制限を発令」『ビジネス短信』23 Jan. 2020, <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/01/f6b6e8ff9cf09867.html>>. 川原田健雄「中国40都市で外出制限 新型肺炎、北京は団体での会食禁止」『西日本新聞』07 Feb. 2020, <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/582158/>>. 「欧州主要国での事業所閉鎖等措置の状況」日本貿易振興機構, 31 Aug. 2021, <https://www.jetro.go.jp/ext_images/world/covid-19/europe/pdf/europe03b_list.pdf>. "Governor Cuomo Signs the 'New York State on PAUSE' Executive Order Coronavirus Health," 20 Mar. 2020, <<https://www.governor.ny.gov/news/governor-cuomo-signs-new-york-state-pause-executive-order>>. "When Did the UK Lockdown Start and How Long Will It Last?" 28 May 2020, <<https://www.heart.co.uk/news/how-long-uk-lockdown-last/>>. 「首相、緊急事態宣言 全国に対象拡大と表明」16 April 2020, <<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58155080W0A410C2000000/>>
- ² Emily Badger, "What Happens When New York City Streets Become Too Crowded Even for New Yorkers," *The Washington Post*, 25 July 2015, <<https://www.washingtonpost.com/news/wonk/wp/2015/07/24/new-york-citys-insanely-busy-streets-are-an-omen-of-the-toxic-politics-to-come/>>.
- ³ "The streets aren't dead quiet, but they're quieter than ever." (Tess McClure, "The Quiet City: A Month in a Transformed New York," *The Spinoff*, 12 Apr. 2020,

- <<https://thespinoff.co.nz/society/12-04-2020/covid-19-in-new-york-city-one-month-on/>>)
- ⁴ “Emptiness proliferates like the virus.” (Michael Kimmelman, “The Great Empty: Photographs by *The New York Times*; Introduction,” 23 Mar. 2020, <https://www.nytimes.com/interactive/2020/03/23/world/coronavirus-great-empty.html>)
- ⁵ New Yorkers have a particular way of showing solidarity. . . . And so, our New York City solidarity needs to take a new form: social distancing, a phrase that has quickly become part of our daily lexicon. For creatures as social as we are, staying at home is difficult, especially in such a dense city. We are a society of people who find comfort in coming together and taking action, who are used to being crammed together in small spaces and making the best of it; robbed of these tools -- we cannot join marches or attend vigils like we normally would, we can't even ride the subway like usual -- we feel trapped. Keeping our distance makes it feel like we are losing, but it has been shown to work when it comes to flattening the curve. (Benjamin Heller, “New for New York City: What Solidarity Looks Like Amid Coronavirus Outbreak,” *Gotham Gazette*, 20 Mar. 2020, <<https://www.gothamgazette.com/opinion/9228-new-for-new-york-city-what-solidarity-looks-like-amid-coronavirus-outbreak>>)
- ⁶ New York City looks more like a ghost town than a bustling metropolis with empty streets and fewer people outside since the outbreak of the coronavirus. (Jessica Snouwaert, “13 Photos of New York City Looking Deserted as the city Tries to Limit the Spread of the Coronavirus,” *Insider*, 1 Apr. 2020, <<https://www.businessinsider.com/coronavirus-pictures-of-new-york-city-empty-streets-2020-3>>)
- ⁷ “Social solidarity leads to policies that benefit public well-being, even if it costs some individuals more. . . . It's an open question whether Americans have enough social solidarity to stave off the worst possibilities of the coronavirus pandemic.” (Eric Klinenberg, “We Need Social Solidarity, Not Just Social Distancing: To combat the coronavirus, Americans need to do more than secure their own safety,” *The New York Times*, 14 March 2020, <<https://www.nytimes.com/2020/03/14/opinion/coronavirus-social-distancing.html>>)
- ⁸ On May 25, Minneapolis police officers arrested George Floyd, a 46-year-old black man, after a convenience store employee called 911 and told the police that Mr. Floyd had bought cigarettes with a counterfeit \$20 bill. Seventeen minutes after the first squad car arrived at the scene, Mr. Floyd was unconscious and pinned beneath three police officers, showing no signs of life. (Evan Hill, et. al. “How George Floyd Was Killed in Police Custody,” *The New York Times*, 31 May 2020, <<https://www.nytimes.com/2020/05/31/us/george-floyd-investigation.html>>)
- The Twitter traffic shows that protest-related tweets, initially strongly centered on George Floyd, quickly widened to be about Black Lives Matter more generally. . . . At the same time that the protests broadened from the specific case to the general

- cause, the movement spread out geographically, from an initial concentration in Minneapolis to other U.S. cities and other nations. (Mary Blankenship and Richard V. Reeves, “From the George Floyd moment to a Black Lives Matter movement, in tweets,” 10 July 2020, <<https://www.brookings.edu/blog/up-front/2020/07/10/from-the-george-floyd-moment-to-a-black-lives-matter-movement-in-tweets/>>)
- ⁹ Before Floyd’s killing, the highest estimate for any American protest – the 2017 Women’s March – was 4.6 million. Polls indicate that, as of mid-June, as many as 21 million adults had attended a Black Lives Matter or police brutality protest. (Elliott C. McLaughlin, “How George Floyd’s death ignited a racial reckoning that shows no signs of slowing down,” CNN, 9 Aug. 2020, <<https://edition.cnn.com/2020/08/09/us/george-floyd-protests-different-why/index.html>>)
- ¹⁰ New York City has been gripped by days of social unrest in the wake of the May 25 killing of George Floyd by Minneapolis police. Large demonstrations have rolled across the city as outraged protesters shout, chant and plead for action to end police brutality against African Americans. / Tensions were already running high in New York. The coronavirus pandemic started tearing through the city in March, leaving at least 17,000 people dead. Hundreds of thousands of New Yorkers lost their jobs because of a quarantine and lockdown that continues to keep all but the most essential businesses shuttered. (Spencer Kimball ed. “We’re built up with frustration’: Scenes and sounds in NYC during 3 days of protest against police brutality,” CNBC, 6 Jun. 2021, <<https://www.cnn.com/2020/06/06/new-york-george-floyd-protest-photos-video.html>>)
- ¹¹ Life is getting back to normal in the metropolis of New York. But nowhere have the links between inequality, poverty, racism and the coronavirus pandemic been more obvious than in the Big Apple (Alexander Görlach “Opinion: New York — A stricken city of contrasts,” DW, 10 Jun. 2020, <<https://www.dw.com/en/opinion-new-york-a-stricken-city-of-contrasts/a-53754751>>)
- ¹² New York City has seen an influx of mutual aid groups — a website called Mutual Aid Hub reports 59 operating in the city now. Though the concept is not new, such efforts have gained energy and attention during the pandemic. Mutual aid involves ordinary people volunteering their time and resources to help one another when the government or large institutions have not adequately addressed their needs. [. . .] Henry said that, as a child of Caribbean immigrants, he grew up in a family that looked out for and supported other people in their community. During the current crisis, he has been amazed by the solidarity of neighbors and the energy of volunteers. (Elizabeth Lawrence, “Love And Solidarity’: Amid Coronavirus, Mutual Aid Groups Resurge In New York City,” NPR, 26 Jul. 2020, <<https://www.npr.org/sections/health-shots/2020/07/26/895115149/love-and-solidarity-amid-coronavirus-mutual-aid-groups-resurge-in-new-york-city>>)
- ¹³ “By lighting the City’s skyline including the iconic Empire State Building this

- evening, we are sending a clear message that we are 'all in' for the city's tourism recovery," said Chris Heywood, NYC & Company's EVP of Global Communications. "We look forward to doing our part to boost this vital industry and begin to recover the jobs and spending that come with it. We ask New Yorkers to do their part and help us rebuild the vibrancy of our city." (Shaye Weaver, "NYC landmarks will light up red tonight in a show of solidarity for the city: The lighting is meant to serve as an inspirational moment and reminder of NYC's resiliency," TimeOut, 17 Sep. 2020, <<https://www.timeout.com/newyork/news/nyc-landmarks-will-light-up-red-tonight-in-a-show-of-solidarity-for-the-city-091720>>)
- ¹⁴ "We can make America, once again, the leading force for good in the world. I know speaking of unity can sound to some like a foolish fantasy. I know the forces that divide us are deep and they are real. But I also know they are not new. Our history has been a constant struggle between the American ideal that we are all created equal and the harsh, ugly reality that racism, nativism, fear, and demonization have long torn us apart. [. . .] And together, we shall write an American story of hope, not fear. Of unity, not division. Of light, not darkness." (President Joseph R. Biden, "Inaugural Address," 20 Jan. 2021, <<https://www.whitehouse.gov/briefing-room/speeches-remarks/2021/01/20/inaugural-address-by-president-joseph-r-biden-jr/>>)
- ¹⁵ "Even before COVID-19, New York was already defined by a gap between the rich and poor. Yet during the pandemic, wealth has become a determinant of survival. The pandemic hit New York in the spring, with almost 800 people dying from COVID-19 each day in April. The city has been uneasy since then. People's lives have been shaken by months of stay-at-home orders, changing public health measures, "Black Lives Matter" protests, the presidential election, and above all the economic consequences of the pandemic, including ever-widening inequality between New Yorkers." ("New York City Rich and Poor — The Inequality Crisis," DW Documentary, <<https://www.youtube.com/watch?v=TfXbzbJQHuw>>)
- ¹⁶ "The metropolitanization of the world does not necessarily just mean a generalization of structures of hierarchy and exploitation. It can also mean a generalization of rebellion and then, possibly, the growth of networks of cooperation and communication, the increased intensity of the common and encounters among singularities. This is where the multitude is finding its home." (Hardt and Negri 260)
- ¹⁷ "The loosening of the proletarian masses is the work of solidarity. In the solidarity of the proletarian class struggle, the dead, undialectical opposition between individual and mass is abolished; for the comrade, it does not exist. Decisive as the masses are for the revolutionary leader, therefore, his great achievement lies not in drawing the masses after him, but in constantly incorporating himself into the masses, in order to be, for them, always one along hundreds of thousands." (Benjamin 50)

¹⁸ See Bhabha 6, 8, 15, 19, 24, 27.

¹⁹ “And minor forms can sometimes work against major ones—a local mail carrier can weaken a centralized network of imperial power by superimposing another, more local network, and a woman poet can retreat to the boundaries of her bedroom to block the encroachment of some very tiresome social networks in favor of richer, more expansive world.” (Levine 131)

²⁰ See Wilkerson 386.

²¹ That winter Robert Cohn went over to America with his novel, and it was accepted by a fairly good publisher. His going made an awful row I heard, and I think that was where Frances lost him, because several women were nice to him in New York, and when he came back he was quite changed. He was more enthusiastic about America than ever, and he was not so simple, and he was not so nice. The publishers had praised his novel pretty highly and it rather went to his head. Then several women had put themselves out to be nice to him, and his horizons had all shifted. For four years his horizon had been absolutely limited to his wife. For three years, or almost three years, he had never seen beyond Frances. I am sure he had never been in love in his life. (Hemingway 16)

²² I dont see how a city no bigger than New York can hold enough people to take the money away from us country suckers. . . . I just want my money back that these dam jews have gotten with all their guaranteed inside dope. (Faulkner 234)

²³ 1923. . . .In August, returns to New York: works at Sweet’s Architectural Catalogue with Hart Crane through the fall. . . . 1925. . . . Cowley publishes articles, reviews, poetry, and translations based on his Paris experiences. Begin to visit friends who have country redoubts outside of New York. (Cowley 338-39)

²⁴ New York was beginning to be crowded with people like ourselves. As American business entered the boom era, it needed more and more propagandists to aid in the increasingly difficult task of selling more commodities each year to families that were given no higher wages to buy them with, and therefore had to be tempted with all the devices of art, literature and science into bartering their future earnings for an automobile or a bedroom suite. (Cowley 207-08)

²⁵ [M]ost of our winters were spent in New York, in furnished rooms or cold-water flats. I remember the good winter when we used to meet two or three times a week at Squarcialupi’s Restaurant on Perry Street. We were all writing poems then, and, sitting after dinner around the long table in the back room, we used to read them without self-consciousness, knowing that nobody there would either be bored by them or gush over them ignorantly. (Cowley 222)

²⁶ I remember being taken to an unfamiliar saloon—it was in the winter of 1925-26—and finding that the back room was full of young writers and their wives just home from Paris. . . . About that time it became possible for young men of promise to support themselves by writing novels and biographies. The book trade was

prospering, new publishers were competing for new authors, and suddenly it seemed that everybody you knew was living on publisher's advices—sometimes a hundred dollars a month for an extended period, sometimes three hundred or five hundred in a flat sum—toward the writing of a book that might or might not be finished. (Cowley 223)

²⁷ Some of us accepted too much from publishers and Wall Street plungers—too many invitations to parties and week-ends, too many commissions for work we didn't really want to do but it paid well; we took our little portion of the easy money that seemed to be everywhere, and we thereby engaged or committed ourselves without meaning to do so. We became part of the system we were trying to evade, and it defeated us from within, not from without; our hearts beat to its tempo. (Cowley 227)

²⁸ I have said that ours was a humble generation, but the truth is that all writers are ambitious (Cowley 101)

²⁹ We laughed too much, sang too much, changed the record and danced too hard, drank more than we intended (for wasn't the liquor free?) -- we fell in love unwisely, quarreled without knowing why, and after a few years we were, in Zelda Fitzgerald's phrase, "lost and driven now like the rest." (Cowley 227)

³⁰ The individualistic way of life was even failing to produce individualism. (Cowley 245)